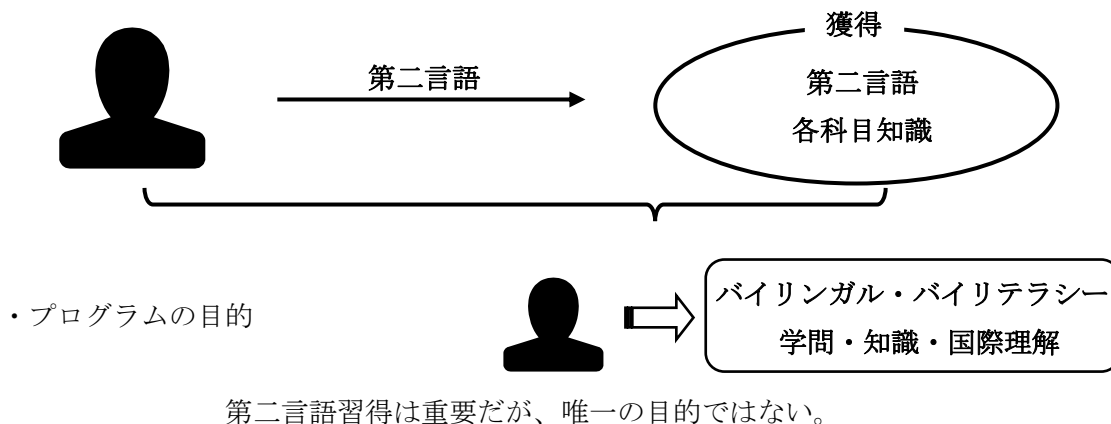


- **The Introduction of Donna Christian**
- ◇ 履歴
- ・ 数学・応用言語学・社会言語学学位
 - ・ 応用言語学センターの会長
 - ・ 継承語提案の顧問
- ◇ 専門分野
- ・ 言語が教育での役割に着目している。例：第二言語習得の問題点、方言の多様性
 - ・ 相互バイリンガルインマージョン(Two-way bilingual immersion)に関する調査などをしてきた。
- ◇ 作品 (不完全)
- ・ Dialects in Schools and Communities, Second Edition (2007) 学校と社会の中の方言 第二版
 - ・ Educating English Language Learners (2006) 英語学習者の教育
 - ・ What Teachers Need to Know About Language (2002) 教師が知るべき、言葉に関すること
 - ・ Bilingual Education (2001) バイリンガル教育
- 【注意 閲覧者の方へ】**
この資料は、東京学芸大学大学院教育学研究科国語教育専攻日本語教育コースの「日本語教育研究法B」(担当：南浦 涼介) ので取り扱ったHinkel (ed) (2011). Handbook of Research in Second Language Teaching and Learning のChapter1の発表資料です。教育的価値、資料的価値としてウェブ掲載をしていますが、いわゆる「論文」ではありませんので、論文への引用等をご遠慮ください。また、分析対象の著作権は著作者、資料文書の著作権は発表者に記しますので、無断転載はご遠慮ください。質問については東京学芸大学南浦研究室 (<http://www.u-gakugei.ac.jp/~minalabo/>) までお願いします。

➤ **Chapter 1 Dual Language Education**

◇ **Introduction はじめに**

- ・ 二言語プログラム： The second language is not a subject.
(第二言語は一つの科目として扱わない。)



- ・ 二言語プログラムの四つのタイプ→p.4 Dual Language Umbrella
p.9 Table1.2 Dual Language Education Program Types
- ・ 本章の目的：二言語教育の概観を紹介する。

◇ **Definitions 定義**

- ・ バイリンガル (マルチリンガル) とは、一つ以上の言語ができる人を指す。
例：家族と話す時→中国語 & 発表する時→日本語
- ・ 母語とは、人間が幼少期から自然に習得する言語。
- ・ 第二言語とは、母語を習得した後に、改めて学習し使用することができるようになった母語以外の言語。
- ・ 多数派言語：社会で多数の人が使用されている言語。

- ・ Partner language : (例) 方言、家庭で使用していない言語
- ・ 継承語 : 異言語環境で子供が親から受け継いだ言葉

◇ The Context 文脈

Tucker(2001)は、我々は世界範囲での多言語使用の普遍性に注目すべきだと述べている。また、人の一生は多様な言語と関わっているという事実を提示している。

「モノリンガルより、バイリンガルとマルチリンガルのほうが人数は多い。……世界のいろんなところに、……日常の教授は二つまたは二つ以上の言語で行われている……教育に多言語の使用は、言語環境が混雑している国・地域に……；特殊な団体・宗教・信仰に……；国民のアイデンティティに影響を与えている。また、革新的な言語教育プログラムは常に人々の国語と地域の言葉の発達とともに、国際言語を熟達させるに役立つ。」

・ Developmental Bilingual Education

Crawford(2004)は、二言語教育に対する恐懼は「人々が少数派言語の忠誠心が強くなって、それを少数派言語を多数派言語に同化する過程を妨害する。」のことだと考えている。

過渡的のバイリンガル教育 (transitional bilingual education) : 母語はただ最初の段階で各科目の「紹介」で使用されている。学習者は授業で第二言語をたくさんインプットされ、短時間に多数派言語を把握する。

・ Foreign Language Immersion Programs

2008 年の調査によって、アメリカに外国語の授業を設置した学校は十年にわたって、その割合は31%から 25%、減少傾向にある。(Rhodes&Pufahl2009)

アメリカに、バイリンガル教育はなかなか主流にならない。

・ Heritage Language Immersion Education

Fishman(2001)

19 世紀末から 20 世紀の早期の間、アメリカへ移民する人が多かった、そのコミュニティの活躍によって、継承語言語学校 (heritage language schools) が流行していた。

例えば、20 世紀に入る頃、ドイツ語学校は 4000 校もある。

しかし、アメリカに、英語母語話者 (言語の多数派) はほかの言語を使用しているひと (言語の少数派) が英語に同化することを望んでいる。

言語復興プログラム 例 : ハワイ原住民の言語保護 (Yamauchi&Wilhelm2001) p.7

・ Two-Way Immersion Programs

言語少数派と言語多数派の学習者を一緒に教育するために、19 世紀 80 年代の頃アメリカに現れた。(Lindholm-Leary2001)

このプログラムは、外国語インマージョン教育法 (foreign language immersion pedagogy) をバイリンガル教育に応用することによって、二つの言語背景をもつ学習者に総合的な教育を行う。

◇ The Rationale for Dual Language Education 二言語教育の理論的根拠

- ・ 第二言語の学習は各科目の学習に妨害するべきではない。
- ・ 二言語教育のメリット

① 言語少数派の学習者

二つの言語の読み書き能力を容易に上昇させる。(August&Shanahan2006)

??? (自己認知と社会発展を高める。) (Hakuta1986; Cummins1995)

知識を獲得しやすい。次に、多数派言語 (英語) の授業に理解しやすい。(Lindholm-Leary2001;

Thomas&Collier2002)

② 言語多数派の学習者

各科目の習得に妨げないよう、インマージョン経験 (immersion experience) を通して、第二言語も習得しやすくなる。(Genesee1987; Johnson&Swain1997; Fortune&Tedick2008)

- ・ 二言語プログラムに参加した学習者が第二言語習得のゴールを果たすことができる。(Howard, Christian, & Genesee2004; Lindholm-Leary2001; Genesee1987; Thomas & Collier2002)

☆ **The Implemental of Dual Language Education** 二言語教育を実現するためには

- ・ 目標達成するためには p.8

① 授業は少数派言語で教える。一小学校に、少数派言語使用率は少なくとも 50%を確保すべき。中学校は少なくとも二つのコースを確保すべき。

② プログラムを通して、バイリンガルリズムとバイリテラシーを育成する

③ 教師は教える言語に熟達すべき (教師はバイリンガルなら一番いい)。また、各科目の専門知識と第二言語の教授法も身につけるべき。

④ Grade-level content standards and curricula are followed.

⑤ このプログラムは小学校の全段階に応用すべき。できたら、中学校の教育にも応用する。

⑥ 言語と文化とのインターアクション、異文化理解、適性 (グローバル世界に対応できる力) に注目すべき。

- ・ 二つのモデル

① 50/50 モデル (partial immersion)

幼稚園から小学校六年生まで、二つの言語使用率は同じ 50%である。

② 90/10 モデル (total immersion)

少数派言語の使用率は、初期の段階には 90%の割合を占めているが、レベル上げに対して、その割合が徐々に 50%までに減少している。

☆ **Developmental Bilingual Education**

・ 過渡的のバイリンガル教育 (transitional bilingual education) の代わりに、1970s と 1980s のアメリカで使用されていた。(Crawford2004)

・ 調査によって、このプログラムは英語 (第二言語/多数派言語) 習得と学術知識の習得を促進できる。(Ramirez1992; Thomas&Collier2002)

・ Thomas&Collier (2002) は、異なるプログラムを用いている五校に縦断調査を行った。その結果、プログラムに参加した言語少数派の学習者は中学校に進学した後、英語 (多数派言語) しか使用されていない授業を受けた学習者より優秀 (outperformed) ということを示している。つまり、学習者の母語の維持は第二言語習得に大きい影響を与える。

・ 最近の研究には、学習者の母語が第二言語習得に有益な転移が行われているということを示している。(August&Shanahan2006)

・ 例 : Basque-Spanish developmental bilingual programs (Cenoz1998)

プログラムに参加していなかった学習者と比べ、参加した学習者のほうがバスク語が上手に見える。その上、スペイン語と各科目成績にも差が見当たらない。

→この場合、developmental bilingual programs と Heritage Language Immersion Education との違いは何？

◇ **Heritage Language Immersion Education**

・このプログラムの学習者は、家庭で少数派言語を使用する。その言語は先祖や自国の文化と強い絆がある。(Hornberger&Wang2008)

・、学校のプログラムは少数派言語が衰えないことに、また、言語復興に重要な役割を果たしている。例えば、学習者に母国語を習得する機会を与え、少数派言語に堪能な話者になる機会を与える。など。

・例1：Hawaiian Language Immersion programs→バイリンガル（ハワイ語と英語）プログラム
の一種、幼稚園・小学校・中学校に応用されている。小学校5年生まではトータルインマージョン
である（90/10）。(Yamauchi&Wilhelm2001; Slaughter1997)

ハワイの文化と言葉を保護するため、親と教育者が提唱したプログラムである。

・このプログラムの重要な構成要素の一つは文化である。ハワイ語インマージョンプログラムは、
ハワイの歴史、文化と価値観を統合していた。

・例2：High school partial immersion program（Benton2001）

中学校二年生まで、半分授業（数学・社会見学・科学と他の選修科目）はマオリ語で行われてい
る。

ハワイでのプログラムと同じ、文化とアイデンティティが言語習得と一緒に強調されている。

◇ **Foreign Language Immersion Programs**

・対象者は主に多数派言語を使用している学習者。

・第二言語で授業をする。

・母語は各科目の習得に貢献しない。(Swain&Johnson1997)

・母語が第二言語習得を支える。母語（How）と第二言語とともに一緒に習得する。

・例1：the St Lambert program (Lambert&Tucker1972)

英語を母語とする学習者にフランス語（ケベック州の多数派言語）を上達にする機会を与える。
フランス語を使って、仕事、またはコミュニケーションできる。(目的)

幼稚園から小1まではフランス語だけで授業する。小2から英語使用開始、小6の時点で英語と
フランス語の使用比率は50/50である。

成果（Genesee1987）

① フランス語はフランス語母語話者と同じレベルに至ることができる。

② 母国語（英語）は他の学習者（プログラムに参加していない人）より上達している。

・例2：Catalan-immersion program（?）→Heritage Language Immersion Educationとの違
いは何？

母語はスペイン語の人がスペインのカタロニア州に引っ越し、カタロニア語とスペイン語と同時
に学習する。

・国際言語のインマージョンプログラムは普遍的である。

例3：私立学校 Katoh 学園

幼稚園から中学校まで、学校の活動の半分以上は英語で行われている。(Bostwick2001)

◇ **Two-Way Immersion Programs**（以下 TWI programs）

・このプログラムは上に言及した三つのプログラムの特徴を持っている。

① 少数派言語の維持と復興。(Developmental Bilingual Education)

② 移民に少数派言語の支援を提供する。(Heritage Language Immersion Education)

- ◇ ③ 言語多数派の学習者に第二言語の習得機会を与える。(Foreign Language Immersion Programs)
 - ・他の三つのプログラムは学習者の言語背景の同一性を要求されていることに対し、TWI programs は二つの言語背景を持つ学習者の人数が大体一致したらいいということだ。
 - ・TWI はアメリカに非常に流行している。スペイン語と英語の組み合わせは見られるが、他に、英語と広東語・フランス語・韓国語などとの組み合わせもある。
 - ・このプログラムは大体小学校から始まるが、最近は中学校の数もう増加傾向にある。
 - ・例1：90/10 two-way immersion program (Calderon & Minaya-Rowe2003)
ほとんどの学習者がラテンアメリカ人(母国語はスペイン語)だが、英語とスペイン語のレベルが統一していない。
第三言語も習得する。その割合は以下である
幼稚園から小2まで：80/10/10 小5から中2まで：45/45/10
 - ・例2：The Francis Scott Key Elementary School in Arlington, Virginia (Christian, Montone, Lindholm, & Carranza1997; Howard & Sugarman2007)
→50/50 two-way immersion program
 - ・メリット
 - ① 教室の中に、同級生の半分程度「第二言語」(少数派言語)を母語とする人だから、教師は唯一の第二言語のモデルではない。従って、二つの言語を話す学習者の間に真正性があり、及び有意義なインターアクション(グループ活動など)を行える。(Genesee1999)
 - ② 言語習得だけではなく、二つの社会団体(言語少数派と言語多数派)の友好関係にも役立つ。(de Jong&Howard2009)
 - ③ バイリンガル教育に、言語少数派がよく分離されることを避けることができる。
 - ・先行研究：Howard, Christian & Genesee(2004) p.14 →母語話者よりよくできている。
Lindholm-Leary(2001) p.14 →90/10 モデルのほうが効果的。
-

◇ Second Language Learning and Teaching in Dual Language Education

- ・二言語教育の一番重要な目的とは、学習者の第二言語を熟達させる。そのため、十分なインプット、インターアクションとアウトプットが必要である。また、the sociolinguistic context for language learning を無視すべきでない。p.14
- ・例：sheltered instruction(Echevarria, Vogt&Short2007)→第二言語を使って授業する。
- ・問い：二つの言語の位置付け
 - ①. 授業は一つの言語しか使用しない。(Howard, Sugarman, Christian, Lindholm-Leary, & Rpgers2007)
(TWI programs の場合→少数派言語?多数派言語?)
 - ②. 二つの言語をミックスして(コード転換)授業する。
- ・学習と教授の注意点
 - ① 今までの二言語教育は、言語の「正しさ」(文法など)に重視していない。
→二言語教育は言語知識と学問と合併すべきだ。(Lyster2007)
 - ② 多様なアウトプット(話す・書く)が必要である。(Swain1985)
→学習者中心と教師中心の授業のバランスを取る。(Lindholm-Leary2007)
 - ③ 実際に第二言語を使用する場面をつくる。
→言語選択の問題

教室内の「言語政策」が必要である。第二言語の使用を励ます。(Lindholm-Leary2007)

◇ Conclusion and Future Direction

二言語教育は第二言語習得を通して、バイリンガルズムとバイリテラシーを実現可能になる。また、学習者の各科目の習得と国際理解にも有意義な転移を行える。

先行研究や具体例を踏まえ、二言語教育のイメージ図を作ったが、いろいろ検討すべきの問題点も残っている。

◇ Program Models and Variation

本稿は二言語教育の主な四つの分類と二つの言語使用モデル(90/10と50/50)を紹介したが、実際の教育場面にはいろんな二言語教育手段(モデル)が存在している。違う言語選択に及ぼす影響は何か(p.15)?周囲の(言語)環境をどのように利用して、第二言語習得を促進するか?などについての研究が重要である。

◇ Biliteracy Development

読解についての研究は多数あるが、二言語の読解についての研究は少ない。これは二言語教育の中に解決すべき問題点でも言える。(Parkes&Ruth2009)

教育(instructional)の観点から見ると、言語選択と言語習得のタイミング(どの段階でどの言語を習得するか)が二言語の読解に影響を与える。

→問い:どのような影響を与えているか?(学習者の言語背景・読解の授業などを踏まえ) 例:
p.16

◇ Time and Articulation across Educational Levels

問い:幼稚園から二言語教育を受けていた学習者は、普通の中学校に入学すると、何か影響を受けているか?

◇ Peer Interaction

問い:グループ活動や活動のタイプが違う学習者(言語背景・言語レベルなど)の参加の質にどのような影響を与えているか?

中学校に進学した後、少数派言語の習得が多数派言語の習得に順調に移すことができるか?(50/50)

◇ Students with Special Needs

・二言語教育が成功できるかどうかは、学習者の背景・個人の認知などを考察する必要がある。

→例:言語障害者(Genesee, Paradis, & Crago 2004)、身体障害者

・二言語教育のメリット

① 言語と学術、同時に習得することができるうえ、他のプログラムと比べ、両方も上達が速い。

② 家庭や社会の言語復興の期待に応える。

③ 言語多数派の学習者に第二言語習得の機会を与えるうえ、彼らの視野を広げることができる。

④ 言語少数派の学習者は多数派言語を習得する同時に、自分の母語を認識し、熟達することができる。

⑤ TWI programsの中に、学習者はお互いの言語を習得することができ、お互いの文化を理解

することができる。

➤ **Relevant Researches**

(1) 『完全改訂版 バイリンガル教育の方法』(2016) 中島和子 文教編集部

学習者：母語は英語 (Foreign Language Immersion Programs)

・表3 早期トータル・イマージョンの4つの段階 pp.101

段階	学年	特徴	留意点
4	高3-中3	バイリンガル保持	L2を継続して保持発達する
3	中2-小2/3	バイリンガル発達	L1とL2の力をバランスを取って伸ばす
2	小2/3-幼(5歳)/小1	L2基礎作り	集中してL2の力を伸ばす
1	幼(4歳)	L1補強	L1をしっかりさせる

表4 早期トータル・イマージョンの2言語の使い分け比率 pp.101

高校	G12 G11 G10 G9	教科別補強フレンチ	
中学校	G8 G7	仏 50%	英 50%
小学校	G6 G5		
	G4 G3	仏 70~80%	英 20~30%
	G2 G1	仏 100%	
幼稚園	SK	仏 100% (ただし園児は英語使用可)	
	JK	英 100%	

・フレンチ・イマージョンの問題点 pp.110~112

① 間違いが訂正されず、教室内方言ができる。

② 聞く力と話す力の差。

→ 視聴覚教材・教具を駆使して、手取り足取りで教えるため、教師中心の授業になりがちである。

③ 文化学習を伴わない。

④ 習っても使うところがないため、保持するのが難しい。 } 言語環境の単一性

(2) 『共生日本語教育学—多言語多文化共生社会のために—』(2007) 株式会社雄松堂

・第一部 共生日本語教育の研究「共生日本語教育の教員養成」

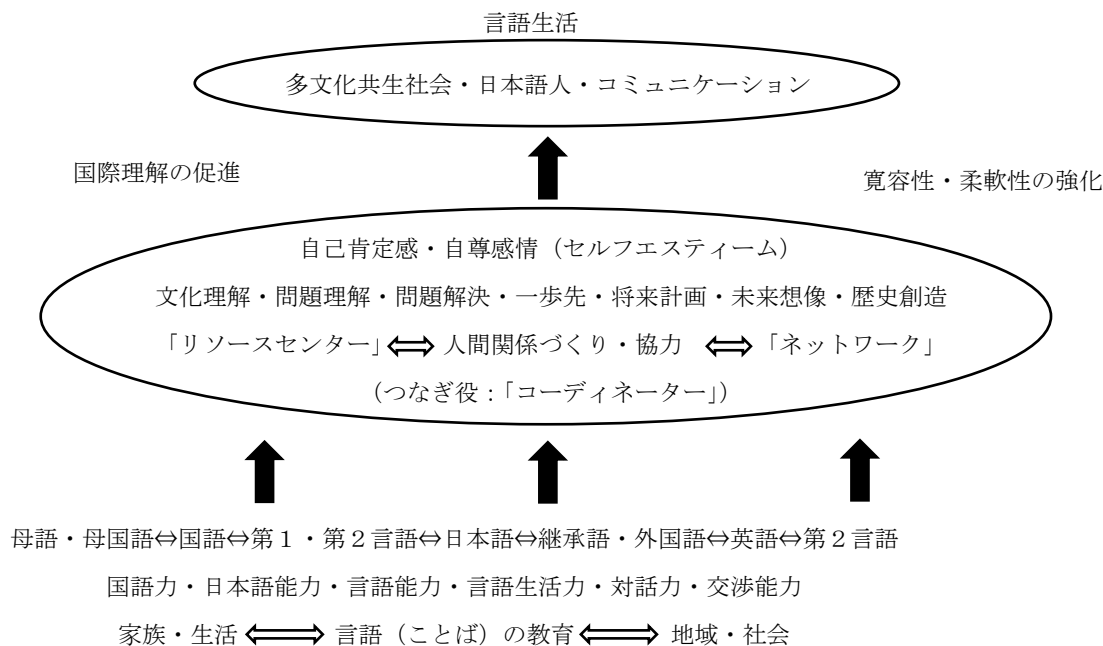
第二部 共生日本語教育学の構築に向けて

(3) 『地域日本語教育から考える共生のまちづくり—言語を媒介にともに学ぶプログラムとは—』(2008)

(4) 東京外国語大学多言語・多文化教育研究センター

「多文化共生社会について考える」

多文化共生社会を支える言語生活の基盤：相関図（野山作成）



(5) 『Obstacles to Minority Language Education in Japan』(日本におけるマイノリティ言語教育の壁) (2015) Cheiron S. McMahill 大東文化大学経営研究所

(6) 『マルチリンガル教育への招待 言語資源としての外国人・日本人年少者』(2010) 中島和子 ひつじ書房

・1~9章 バイリンガル 10章 マルチリンガル教育の方法 (4~5章 日本の言語教育の実態)

・バイリンガル育成をサポートする豊かな言語環境要因 pp.300~301

家庭 家庭での積極的な第1(少数)言語使用

子ども本人および親の将来への明確な目的意識

親のアイデンティティや教育観

学校 学校と家庭との連携・協力

学校での少数言語・文化の積極的導入・支援

教師の質(教授法も含め)の向上

地域社会 地域社会での第1(少数)言語および第2言語(現地語)のバランスのとれた接触と積極的な言語使用

少数民族集団の民族言語的活力の高まり

・リテラシーとは p.354

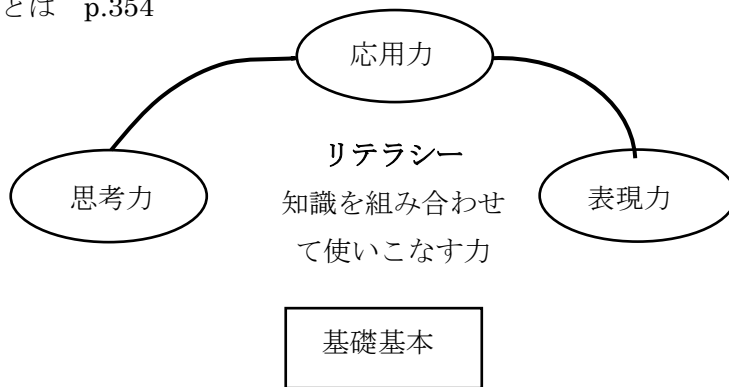


図5 PISAの「リテラシー」(図子2006:35)